短 報

誤飲による急性二硫化炭素中毒の一症例

A Case of Acute Carbon Disulfide Poisoning by Accidental Ingestion

1930年代から、本邦でもビスコースレーヨン工場を中心に多くの発生をみた二硫化炭素中毒も、近年その急性中毒例に遭遇することはきわめて稀となった¹⁾。しかし、二硫化炭素（以下 CS_2 と略す）はゴム製造および加工・脂肪抽出・羊毛・皮革等の工業で使用されるほか穀物貯蔵用の殺虫剤、医薬その他化学薬品として使用されるなど、広い用途があり、各使用現場で中毒発生の危険はある²⁾。著者も最近、防虫剤として使用されていた CS_2 の誤飲による急性中毒例を経験し、その臨床症状を観察しえたので報告する。なお今回の中毒事故発生の背景には、他の有機溶剤中毒にもみられるように、零細企業における有害物使用・管理の問題が存在しており、本例も単なる誤飲事故をこえた産業衛生上の意義をも持つものと考えられる。

症 例 42 歳女性、食料品店経営

現病歴：数年前より倉庫の防虫剤として CS_2 を使用していた。昭和51年6月26日午後6時頃、清涼飲料水のビンに入れてあった CS_2 を誤って約5ml 程飲みこんだ。すぐ購入した薬局に電話したが心配ないといわれ、自分で口に指を入れて嘔吐する程度の処置をとった。約5時間後の午後11時頃、口のまわりのしびれ感と悪心、嘔吐出現しT病院受診。約12時間後の27日午前6時頃より上腹部の熱感と波状的な興奮状態出現し、当院に転

送入院となる。

入院時現症：著しい興奮状態であったが意識は比較的明瞭、チアノーゼは認めない。瞳孔正円、対光反射正常。血圧130~80。呼吸1分間26でやや深い。脈拍1分間96で整、緊張良好。心肺聴診上異常なし。両側上下肢腱反射高進、両側下肢でBabinski 反射陽性。触覚検査でビリビリした痛み訴え、知覚過敏が認められた。

入院後経過：入院後胃洗浄、浣腸施行。誤飲後約16時間には平穏状態となり意識も明瞭となった。翌28日には歩行時の軽いふらつき感以外訴えなく、神経学的検査にても異常を認めなくなった。なお6月28日の検査所見では白血球数9,200で核の左方移動が認められた以外は異常所見はみられなかった。ところが誤飲後5日目の6月30日午後11時頃患者はナース・ルームへグレープ・フルーツを持って現われ、「目の前に黄色い物が浮んできて神様がグレープ・フルーツを食べなさい、食べなさいと言った」と興奮気味で、はじめて幻覚・妄想症状の出現をみた。この頃見当識は良好で記憶力の軽度低下のみ認めていた。以後たびたびこの種の幻覚・妄想症状をみたが平静にもどった時には病識があり、「何んであんなことをしゃべったのか」といぶかっている。7月4日家族の希望強く退院となった。退院後1~2日間時々発作的な興奮と幻覚・妄想を認めたが徐々に消退し、誤飲後12日目の7月7日T病院外来受診時には軽度の記憶力低下以外所見なく日常生活に復帰しはじめ、以後経過良好で昭和51年9月現在健康に過ごしている。

以上のように本例では CS_2 約5ml 誤飲後5時間で口のまわりのしびれ感と消化器症状を認め、12時間後に興奮状態となったが16時間後には平穏に復し、しばらく著明な症状のない時期を経て5日目に幻覚・妄想を中

Fig. 1.

Fig. 2.

Fig. 3.

心とする精神症状が出現,これが約1週間持続して消退し,以後後遺症と思われるものなく健康に生活できるようになるという経過をとった。

心電図変化

Fig. 1 は6月27日午前11時,誤飲後約17時間の心電図である。洞性頻脈とⅡ・Ⅲ・aV_F誘導での尖鋭なP波がみられ, V₃からV₆誘導ではSTの低下が認められる。Fig. 2は翌28日午前10時のものでまったく正常に復している。本例の心電図変化がどのような機序で出現したのかは明らかでないが,今後の検討を要する。

脳波異常

Fig. 3は6月28日の脳波である。基礎波は8~9c/sのびまん性不規則α波を示す。この基礎波の上に突発性の4~6c/s高電位θ波の群発をみる³⁾。更に光刺激(9~18c/s)でθ波が誘発される傾向を示した。本例の脳波異常は7月2日まで観察されているがその後は追跡検査できていない。

中毒発生の背景

防虫剤としてのCS₂は食料品店経営の同業者間では非常に効力のある防虫剤として広く使用されているという。一方入手は簡単で印鑑さえ持参すれば薬局で購入できる。本例では販売する側にも使用する側にも安全知識

が欠けていた。零細企業において有害物質に対する安全知識が十分に与えられないまま大量使用され中毒が発生する例は多い⁴⁾。零細企業労働者保護の意味からも,有害物質取扱いについての責任ある行政指導が望まれる。

本論文の要旨は昭和51年9月,第19回日本産衛学会北陸甲信越地方会にて発表した。

文 献

- 1) 桜井治彦, 外山敏夫, 後藤 稠: 職業病とその対策, 二硫化炭素中毒, 69—104, 興生社, 東京, 1969.
- 2) 井上 俊: 新労働衛生ハンドブック, 二硫化炭素中毒, 852—854, 労働科学研究所, 川崎, 1974.
- 3) 馬淵干之, 高城 晋, 竹内康浩, 古池保雄, 山内一征, 柴田寿彦: 慢性有機溶剤中毒症の神経症状, 医学のあゆみ, 88(3): 97—106, 1974.
- 4) 野村 茂, 原 一郎: 職業病とその対策, 有機溶剤中毒, 107—175, 興生社, 東京, 1969.

山田裕一

城北病院内科

Yuichi YAMADA

Department of Internal Medicine, Jōhoku Hospital,
Kyomachi, Kanazawa, 920 Japan

昭和52年3月9日受付

通信先: 山田あて, Reprint requests to Y. Yamada